

森
鷗外

じいさんばあさん



じふねんばあさん

文化六年の春が暮れて行く頃であつた。麻布竜土町^{あざぶりゆうどちよう}

の、今歩兵第三聯隊^{れんたい}の兵營になつてゐる地所の南隣で、

^{みかわのくにおくとの}

三河国奥殿の領主松平左七郎乗羨^{のりのぶ}と云う大名の邸^{やしき}の中^{うち}

に、大工が這入^{はい}つて小さい明家^{あきや}を修復してゐる。近所の

ものが誰の住まいになるのだと云つて聞けば、松平の家

中の土^{さむらい}で、宮重久右衛門^{みやしげきゆうえもん}と云う人が隠居所^{こしら}を拵^{こしら}える

のだと云うことである。なるほど宮重の家の離れ座敷と云つても好いような明家で、只台所だけが、小さいなが

らに、別に出来ていたのである。近所のものが、そんなら久右衛門さんが隠居しなさるのだからかと云って聞けば、そうではないそうである。田舎いなかにいた久右衛門さんの兄きが出て来て這入るのだと云うことである。

四月五日に、まだ壁が乾き切らぬと云うのに、はたして見知らぬ爺じいさんが小さい荷物を持って、宮重方に著ついて、すぐに隠居所に這入った。久右衛門は胡麻塩頭ごましおあたまをして、この爺いさんは髪が真白である。それでも腰などは少しも曲がっていない。結構な拵こしらえの両刀を挿さした姿がなかなか立派である。どう見ても田舎者らし

くはない。

爺いさんが隠居所に這入ってから二三日立つと、そこへ婆あさんが一人来て同居した。それも真白な髪を小さい丸鬚まるまげに結いっていて、爺いさんに負けぬように品格が好い。それまでは久右衛門方の勝手から膳ぜんを運んでいたのに、婆あさんが来て、爺いさんと自分との食べる物を、子供がまま事をするような工合に拵おえることになった。

この翁媪おうおん二人の中の好いことは無類である。近所のものは、若もしあれが若い男女であつたら、どうも平氣で見ていることが出来まいなどと云つた。中には、あれは夫

婦ではあるまい、きょうだい兄妹だろうと云うものもあつた。その理由とする所を聞けば、あの二人は隔てのない中うちに礼儀があつて、夫婦にしては、少し遠慮をし過ぎていようだと云うのであつた。

二人は富裕とは見えない。しかし不自由はせぬらしく、又久右衛門に累を及ぼすような事もないらしい。殊ことに婆あさんの方は、跡から大分だいぶん荷物が来て、衣類なんぞは立派な物を持っているようである。荷物が来てから間もなく、誰が言い出したか、あの婆あさんは御殿女中をしたものだと云う噂うわさが、近所に広まつた。

二人の生活はいかにも隠居らしい、気楽な生活である。爺いさんは眼鏡を掛けて本を読む。細字で日記を附ける。毎日同じ時刻に刀剣に打粉うちこを打って拭ふく。体を極きめて木刀を揮ふる。婆あさんは例のまま事の真似をして、その隙すきには爺いさんの傍そばに来て団扇うちわであおぐ。もう時候がそろそろ暑くなる頃だからである。婆あさんが暫しばらくあおぐうちに、爺いさんは読みさした本を置いて話をし出す。二人はさも楽しそうに話すのである。

どうかすると二人で朝早くから出掛けることがある。最初に出て行った跡で、久右衛門の女房が近所のものに

話したと云うことば詞が偶然伝えられた。「あれは菩提所ぼだいしよの松泉寺しょうせんじへ往きなすったのでございます。息子さんが生きていなさると、今年三十九になりなさるのだから、立派な男盛と云うものでございまして」むこううらと云ったと云うのである。松泉寺と云うのは、今の青山御所の向裏むこううらに当たる、赤坂黒鋤谷くろくわだにの寺である。これを聞いて近所のもとは、二人が出歩くのは、最初のその日に限らず、過ぎ去った昔の夢の迹あとを辿たどるのであると察した。

とかくするうちに夏が過ぎ秋が過ぎた。もう物珍しげに爺いさん婆あさんの噂をするものもなくなつた。所が、

もう年が押し詰まって十二月二十八日となつて、きのうの大雪の跡の道を、江戸城へ往反する、歳暮拜賀の大小名、諸役人織るが如き最中に、宮重の隠居所にいる婆あさんが、今お城から下がったばかりの、邸の主人松平左七郎に広間へ呼び出されて、將軍徳川家齊の命を伝えられた。「長年遠国に罷在候夫の為、貞節を尽候趣聞召され、厚き思召を以て褒美として銀十枚下し置かる」と云う口上であつた。

今年の暮には、西丸にいた大納言家慶と有栖川職仁親王の女楽宮との婚儀などがあつたので、頂戴物をす

る人数にんずが例年よりも多かつたが、宮重の隠居所の婆あさに銀十枚を下さつたのだけは、異数いすうとして世間に評判せられた。

これがために宮重の隠居所の翁媪二人は、一時江戸に名高くなつた。爺いさんは元大番石川阿波守総恒組いしかわあわのかみふさつねくみ美濃部伊織みのべいおりと云つて、宮重久右衛門の実兄である。婆あさんは伊織の妻るんと云つて、外桜田そとさくらだの黒田家の奥に仕へて表おもてづかい使格かになつていた女中である。るんが褒美を貰つた時、夫伊織は七十二歳、るん自身は七十一歳であつた。

明和三年に大番頭おおばんがしらになった石川阿波守総恒の組に、美濃部伊織と云う士さむらいがあつた。剣術は儕輩せいはいを抜いていて、手跡も好く和歌の嗜たしなみもあつた。石川の邸は水道橋外で、今白山はくさんから来る電車が、お茶の水を降りて来る電車と行き逢う辺あたりの角屋敷かどやしきになつていた。しかし伊織は番町ばんちように住んでいたので、上役とは詰所で落ち合うのみであつた。

石川が大番頭になつた年の翌年の春、伊織の叔母婿おばむこで、やはり大番を勤めている山中藤右衛門と云うのが、丁度三十歳になる伊織に妻を世話をした。それは山中の妻の親戚しんせきに、戸田淡路守あわじのかみうじゆき氏之の家来有竹某ありたけぼうと云うものがあつて、その有竹のよめの姉を世話をしたのである。

なぜ妹が先によめに往いつて、姉が残つていたかと言つと、それは姉が邸奉公をしていたからである。素もと二人の女は安房国朝夷郡真門村あわのくにあさいごおりまかどむらで由緒のある内木四郎右衛門うちきしろうえもんと云うものの娘で、姉のるんは宝曆二年十四歳ほうれきで、市ヶ谷門外の尾張中納言宗勝おわりちゆうなごんむねかつの奥の軽い召使になつた。それが

ら宝曆十一年尾州家では代替だいがわりがあつて、宗睦むねちかの世になつたが、るんは続いて奉公して、とうとう明和三年まで十四年間勤めた。その留守に妹は戸田の家来有竹の息子の妻になつて、外桜田の邸へ来たのである。

尾州家から下がつたるんは二十九歳で、二十四歳になる妹の所へ手助てだすけに入り込んで、なるべくお旗本うちの中で相応な家へよめに往きたいと云つていた。それを山中が聞いて、伊織に世話をしようと言つと、有竹では喜んで親元になつて嫁入をさせることにした。そこで房州ぼうしゅううまれの内木うち氏のるんは有竹おか氏を冒して、外桜田の戸田邸か

ら番町の美濃部方へよめに来たのである。

るんは美人と云う性たちの女ではない。若もし床の間の置物のような物を美人としたら、るんは調法に出来た器具のような物であろう。体格が好く、押出しが立派で、それで目から鼻へ抜けるように賢く、いつでもぼんやりして手を明けていると云うことがない。顔も顴骨かんこつが稍出張ややつているのが疵きずであるが、眉まゆや目の間に才気が溢あふれて見える。伊織は武芸が出来、学問の嗜もあつて、色の白い美男である。只この人には肝癩かんしやくもち持と云う病があるだけである。さて二人が夫婦になつたところが、るんはひどく

夫を好いて、手に据えるように大切にし、七十八歳になる夫の祖母にも、血を分けたものも及ばぬ程やさしくするので、伊織は好い女房を持ったと思つて満足した。それで不断の肝癩は全く迹あとを斂おさめて、何事をも勘弁するようになつていた。

翌年は明和五年で伊織の弟宮重はまだ七五郎と言つていたが、主家しゅうけのその時の当主松平石見守乗穩いわみのかみのりやすが大番頭になつたので、自分も同時に大番組に入いつた。これで伊織、七五郎の兄弟は同じ勤をすることになつたのである。

この大番と云う役には、京都二条の城と大坂の城とに

交代して詰めることがある。伊織が妻を娶めとってから四年立って、明和八年に松平石見守が一条在番の事になった。そこで宮重七五郎が上京しなくてはならぬのに病氣であった。当時は代人だいにん差立さしたてと云うことが出来たので、伊織が七五郎の代人として石見守に附いて上京することになった。伊織は、丁度妊娠して臨月になっているるんを江戸に残して、明和八年京都へ立った。

伊織は京都でその年の夏を無事に勤めたが、秋風の立ち初そめる頃、或る日寺町通の刀剣商の店で、質流れだと云う好い古刀を見出した。兼かねて好い刀が一腰こし欲しいと心

掛けていたので、それを買いたく思ったが、代金百五十両と云うのが、伊織の身に取っては容易ならぬ大金であった。

伊織は万一の時の用心に、いつも百両の金を胴巻に入れて体に付けていた。それを出すのは惜しくはない。しかし跡五十両の才覚が出来ない。そこで百五十両は高くないと思いつながら、商人にいろいろ説いて、とうとう百三十両まで負けて貰うことにして、買い取る約束をした。三十両は借財をする積つもりなのである。

伊織が金を借りた人は相番あいばんの下島甚右衛門しもじまと云うもの

である。平生親しくはせぬが工面くめんの好いと云うことを聞いていた。そこでこの下島に二十両借りて刀を手に入れ、拵やえを直しに遣った。

そのうち刀が出来て来たので、伊織はひどく嬉しく思つて、あたかも好し八月十五夜に親しい友達柳原小兵衛等二三人を招いて、刀の披露ひろう旁かたがたち馳走そうをした。友達は皆刀を褒ほめた。酒酣たけなわになつた頃、ふと下島がその席へ来合せた。めつたに来ぬ人なので、伊織は金の催促に来たのではないかと、先まず不快に思つた。しかし金を借りた義理があるので、杯さかずきをさして団欒まといに入れた。

暫しばらく話をしてしているうちに、下島の詞ことばに何となく角があるのに、一同気が附いた。下島は金の催促に来たのではないが、自分の用立てた金で買った刀の披露をするのに自分を招かぬのを不平に思つて、わざと酒宴の最中に尋ねて来たのである。

下島は二言三言伊織ふたことみことと言い合っているうちに、とうとうこう云う事を言った。「刀は御奉公のために大切な品だから、随分借財をして買って好かろう。しかしそれに結構な拵ぜいたくをするのは贅沢だ。その上借財のある身分で刀の披露をしたり、月見をしたりするのは不心得だ」と云

った。

この詞の意味よりも、下島の冷笑を帯びた語気が、いかにも聞き苦しかったので、俯向うつむいて聞いていた伊織は勿論もちろん、一座の友達が皆不快に思った。

伊織は顔を挙げて云った。「只今のお詞は確に承った。その御返事はいずれ恩借の金子きんすを持参した上で、改あらためて申上げる。親しい間柄と云いながら、今晚わざわざ請待した客の手前がある。どうぞこの席はこれでお立下されい」と云った。

下島は面色かおいろが変った。「そうか。返れと云うなら返る。」

こう言い放って立ちしなに、下島は自分の前に据えてあつた膳を蹴返した。

「これは」と云つて、伊織は傍にあつた刀を取つて立つた。伊織の面色はこの時變つていた。

伊織と下島とが向き合つて立つて、二人が目と目を見合せた時、下島が一言「たわけ」と叫んだ。その声と共に、伊織の手に白刃が閃いて、下島は額を一刀切られた。

下島は切られながら刀を抜いたが、伊織に刃向うかと思つと、そうでなく、白刃を提げたまま、身を翻し

て玄関へ逃げた。

伊織が続いて出ると、脇差を抜いた下島の仲間が立ち塞がった。^{ふさ}「退け^の」と叫んだ伊織の横に払った刀に仲間間は腕を切られて後へ引いた。

その隙^{ひま}に下島との間に距離が生じたので、伊織が一飛^{ひととび}に追い縋^{すが}ろうとした時、跡から附いて来た柳原小兵衛が「逃げるなら逃がせい」と云いつつ、背後^{うしろ}からしつかり抱き締めた。相手が死なずに済んだなら、伊織の罪が軽減せられるだろうと思ったからである。

伊織は刀を柳原にわたして、しおしおと座に返った。

そして黙って俯向いた。

柳原は伊織の向いにすわって云った。「今晚の事は己おれを始め、一同が見ていた。いかにも勘弁出来ぬと云えばそれまでだ。しかし先へ刀を抜いた所存を、一応聞いて置きたい」と云った。

伊織は目に涙を浮べて暫く答えずにいたが、口を開いて一首の歌を誦じゆした。

「いまさらに何なにとか云はむ黒髪くろかみの

みだれ心はもとすゑもなし」

下島は額の創きずが存外重くて、二三日立って死んだ。伊織は江戸へ護送せられて取調を受けた。判決は「心得違かどの廉かどを以て、知行召放され、有馬左兵衛佐允純ありまさひょうえのすけまさずみへ永ながの御預仰付らる」と云うことであつた。伊織が幸橋さいわいばし外そとの有馬邸から、越前国丸岡へ遣られたのは、安永と改元せられた翌年の八月である。

跡に残つた美濃部家の家族は、それぞれ親類が引き取つた。伊織の祖母貞松院ていしやういんは宮重七五郎方に往き、父の

顔を見ることの出来なかつた嫡子平内へいないと、妻るんとは有竹の分家になつてゐる笠原新八郎方に往つた。

二年程立つて、貞松院が寂しがつてよめの所へ一しよになつたが、間もなく八十三歳で、病氣と云う程の容体ようたいもなく死んだ。安永三年八月二十九日の事である。

翌年又五歳になる平内が流行の疱瘡ほうそうで死んだ。これは安永四年三月二十八日の事である。

るんは祖母をも息子をも、力の限かぎり介抱して臨終を見届け、松泉寺へ葬つた。そこでるんは一生武家奉公をしようと思ひ立つて、世話になつてゐる笠原を始、親類に

奉公先を捜すことを頼んだ。

暫く立つと、有竹氏の主家戸田淡路守氏養の隣邸、

ちくぜんのかくに

筑前国福岡の領主黒田家の当主松平筑前守治之の奥で、

はるゆき

物馴れた女中を欲しがっていると云う噂が聞えた。笠原

は人を頼んで、そこへるんを目見えに遣った。氏養と云

うのは、六年前に氏之の跡を続いだ戸田家の当主である。

黒田家ではるんを一目見て、すぐに雇い入れた。これが安永六年の春であった。

るんはこれから文化五年七月まで、三十一年間黒田家に勤めていて、治之、治高、齊隆、齊清四代の奥方に仕

はるゆき

治之、

はるたか

治高、

なりたか

齊隆、

なりきよ

齊清四代の奥方に仕

え、表おもてづかい使格に進められ、隠居して終身二人にんふ扶持ちを貰うことになった。この間るんは給料の中うちから松泉寺へ金を納めて、美濃部家の墓に香こう華げを絶やさなかつた。

隠居を許された時、るんは一旦笠原方へ引き取つたが、間もなく故郷の安房へ歸つた。当時の朝夷郡真門村で、今の安房郡江見えみ村である。

其翌年の文化六年に、越前国丸岡の配所で、安永元年から三十七年間、人に手跡や剣術を教えて暮していた夫伊織が、「二月八日しゅんめい浚明いん院ご殿つ御追善いぜんの為、御慈悲の思召を以て、永ながの御預おあずけ御免ごめん仰出おおせされ」て、江戸へ歸るこ

とになった。それを聞いたるんは、喜んで安房から江戸へ来て、竜土町の家で、三十七年振に再会したのである。

日本文学電子図書館

阿部一族・舞姫

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館